

January 2012

jALTAK

JOURNAL



ケニア日本語教師会会報

JICC前所長 挨拶

JICC新所長 挨拶

第四回ケニア日本語スピーチ・コンテスト

日本語教授法基礎講座

日本語教授法ワークショップ

JICC日本語入門講座

JALTAK勉強会

日本語能力試験

My Experiences in Japan

Kisumu Children's Festival

New Books on the JLPT

vol.2

育って行く若い世代の交流に多少なりとも貢献しえたのではないかと自負しています。

今後は、後に続く方々が、漸く根付いてきたこのような日本語環境を盛り立て、更に大きな幹に育て上げて貰いたいと切に願っています。最後にJALTAKの皆さん、3年間どうもお世話になりました。

JICC菊地前所長挨拶

三年間に渡り、ケニアの日本語教育を支えてくださいました、在ケニア日本大使館広報文化センター(JICC)の菊地所長が2011年4月末にケニアを離れました。時に厳しい意見を交じえながら、常に、ケニアの日本語教育の発展を考えてくださいました菊地前所長に改めて感謝したいと思います。



在ケニア日本大使館広報文化センター前所長
菊地 斉

Kikuchi Hitoshi
Former Director

Japan Information and Culture Center

JICC宇賀神実紀新所長挨拶

2011年3月末より、菊地前所長に代わり、宇賀神実紀所長が着任いたしました。持ち前のバイタリティで、ケニアの日本語教育に新しい風を吹き込んでくださることが期待されます。

在ケニア日本大使館広報文化センター所長
宇賀神実紀
Ugajin Miki
Director

Japan Information and Culture Center

3 月末より着任し、ケニアでの日本語教育の普及のほか、日本を正しく理解してもらうための様々な業務を行っています。日本文化や事情の紹介、日本の政策広報、日本政府奨学金事業が代表的な業務です。同時に、ケニアの大自然を満喫し、ケニアの魅力を感じたいと、大小様々な国立公園や保護区、西部の美しいビーチへの旅事情報の収集にも余念がありません。

さて、日本語教育に関してですが、ケニアは東アフリカで最も日本語学習者が多く(推定1000人)、2006年以降定期的に日本語能力試験が実施され、また、定期的に日本語弁論大会が開催されるなど、これまでに一定の実績が築かれています。これを土台として、日本語学習者のすそ野を広げるため、JALTAKの皆さんの協力を得て、様々な活動を行っていかねばと考えています。それは、日本語能力試験や弁論大会の継続はもちろんのこと、日本語に関心をもつ層への入門レベルのレッスンの提供(再開)や、設立在模索されてきている、将来日本語教師を目指す学生等の組織化の実現など

「対日理解の促進と親日感の醸成」という御旗の下、それを実現するツールの一つとしてケニアにおける日本語教育促進を位置付け、ケニア日本語教師会(JALTAK)の皆様とともに日本語能力試験及び日本語弁論大会の毎年開催等に取り組んできました。他方、JALTAK自身の活動の充実等、達成しえなかった課題も多かったように感じています。

このような中でも、上記のような活動の反射作用として、この3年間にケニア国内各地で日本語乃至日本倶楽部が組織化され、多くの親日家の卵が育ちつつあり、現地で相互理解の増進に努められている姿には勇気づけられるものがあります。また、本邦の学校での国際理解教育を手助けすべく、個人的にケニアと日本の中学校生徒の文通を過去2年間以上にわたり取り持ち、これから

です。また、JALTAKメンバーに代表される、日本語教師陣のたゆみない日本語能力や教育法の質の向上も、日本語教育の普及には欠かせないものであると思われま。JALTAKという組織が、ケニア人教員の日本語能力運用の向上に、邦人教員の教授法の情報交換の場として、さらに活性化されていくよう、微力ながら、協力させていただければと考えています。

このような目標を掲げる私自身、日本語教育の現場についての知識はほとんどありません。時間の許す限り、皆さんの教室に出向き、また、個々に意見交換の機会を持つなどして、現場で多くのことを学ばせて頂ければと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

第四回ケニア日本語スピーチコンテスト

2011年3月5日、日本大使館日本広報文化センターにて、第四回日本語スピーチコンテストが開催されました。同時に日本文化祭も行われたこともあり、300人を越す聴衆を前に、20名の弁士が日本語で様々な話題についてスピーチをしました。また、同時に、有志による日本語の歌や劇などのイベントもあり、聴衆を楽しませました。

スピーチコンテストの優勝者はダニエル・アレバさん。空手について、アクションも交えながら、日本人も知らない知識と、空手に対する思いを熱弁してくれました。

審査員の足立愛美さん、クリストファー・カマウさんのレポート及び、優勝者のダニエル・アレバさんへのインタビューをご紹介します。



2011年3月5日、日本大使館多目的ホールにて、日本語スピーチ・コンテストが開催された。今年は大使館による日本文化祭も同時に行われており、非常ににぎやかなものとなった。スピーチは午前と午後の部に分けられ、それぞれ約10名ずつがスピーチをした。その合間には、日本語を教える学校やJICAボランティアの関わる施設などから歌や会話劇なども披露され、このイベントに花を添えた。

外国語で大勢の人の前で話をするというのは、非常に勇気のいることである。コンテストが始まる前、私は大学時代のことを思い出していた。外国語大学でスワヒリ語を専攻していたのだが、2年生になると、学内スワヒリ語スピーチ・コンテストに参加しなければならない。何度も原稿を書き直した後、発音が自然にできるよう、また原稿を見ずにスピーチができるように繰り返し原稿を読んだ。今日、ここでスピーチをするこの参加者たちも、今日の日のためにきっと同じように準備をしてきたのだろう。そして目の前には300人もの観客。ケニア人の日本語の学生だけならまだしも、4分の1ほどは日本人という状況では緊張もひとしおに違いない。しかしそんな私の思いとは正反対に、緊張のかけらも感じさせず、むしろその場を楽しんでいるように見えるほど、堂々とスピーチを行う参加者が多かった。学習期間が1年にも満たない学生がほとんどで、学習済みの文法などはごく限られたものであったはずだ。それにも関わらず、知っている限りの表現を駆使して、これほど堂々と語る彼らの姿には頼もしささえ感じた。フリー・テーマであったため、内容はバラエティに富んでいた。母国ケニア、家族や友達、そして日常生活。中には、スピーチの中で、習っている合気道を披露したり、日本語の歌を歌ったりする参加者もあった。遠い国日本に関心を持ってきている人達がこんなにたくさんいるのかと、私は心温まる思いであった。

JALTAKとして反省すべき点もたくさん挙げた今回のスピーチ・コンテストであったが、個人的には、このイベントを非常に楽しむことができた。何らかの賞に輝いた人、惜しくもそれを逃した人、そしてうまくスピーチができなかった人。彼ら参加者には、このスピーチ・コンテストに参加したことを誇りに持ち、ぜひ、これからも日本や日本語と関わり続けてほしい。そして観客としてスピーチを聞いていた学生達も含め、彼ら全員の日本に対する関心が、このイベントを通して、今、一層深くなっていることと信じたい。

今年の参加者が今後どのように成長するか、また、これからどんな新たな学生達に会えるか、今から来年のスピーチ・コンテストが楽しみである。

エア・トラベル
日本語教師
クリストファー・カマウ
Christopher Kamau
Japanese teacher
Air travel

The annual event, Japanese Speech Contest this year took place on March 5 at the multi-purpose hall, Embassy of Japan which is located in Upper-hill, Nairobi. Many teachers of Japanese language in Kenya had been involved in preparing the contest for months, assisting students to develop speeches, setting up and decorating the venue, organizing entertainment performance, etc.

It was on a Saturday in the morning. It was the Day for the students and the teachers to unveil all they had been preparing. We could see that the judges were holding a brief meeting, fifteen minutes before the start of the event. And at long last, the master of ceremony broke the silence with his opening remark and the contest began.

Each participant was to deliver his or her speech within five minutes. As the contestants came forward one after the other, I could sense the tension in them. That was probably partly because there were the big audience of about three hundreds people. Among the crowd were a number of Japanese people, some from the embassy, JICA and Japanese school; others were people from tourism, hotel and restaurant industry, and prominent personalities from different business and sports organizations, and of course many students from universities, colleges, secondary and primary schools.

The contest was divided into two sessions, morning and afternoon. We also had entertainment of songs and skits from different schools, colleges and institutions between the speeches. After the morning part, the whole crowd also had a chance to have a taste of Japanese cuisine which was prepared and served by well-trained Japanese chef.

Sampling of Japanese food was part of Japanese cultural festival which Embassy of Japan organized for that day. Alongside with the speech contest, there were other cultural activities concurrently taking place, such as karate demonstration, experiencing Japanese traditional toys, talks on Japanese government scholarship, Origami class, to mention a few.

Afternoon session was as exciting as the morning. By around 2:30pm, all contestants had finished their presentations. There were in total more than twenty contestants, and it seemed to be so difficult for judges to determine the winners of top positions and outstanding performance, considering the number of good speeches delivered.

After intense deliberation by the judge panels, Chief Judge, Mr. Jun Arisue came forward to announce the

winner as the crowd cheered with appraisals. The first position was the contestant who talked on the aikido, a traditional Japanese martial art. In the middle of the speech, he also captivated the audience with a demonstration of some of the techniques of the martial art. There was also a blind contestant who stunned the audience with her fluent Japanese. She was given a special Chief Judge award.

The winners could not believe some of the prizes they had won together with the certificate of the positions, such as 22 inch brand new Sanyo flat TV set, beautiful photo books of sceneries in Japan, flash disks and others, while all the participants could not hide the joy of acquiring the certificate of participation. The event came to an end, as Mr. Katsuji Nakamura, Chair of JALTAK, gave the vote of thanks to all who were involved in the event: contestants, teachers, audience, judges, and sponsors such as Embassy of Japan, Sanyo Electronic, Mr. Yano, that supported the event financially and materially.

All in all, it can be safely said that this year's speech contest was concluded successfully. The contest aims at reaching the hidden potential among Japanese language learners and encouraging others who are still at basic level. It is also meant to bring all the stakeholders of Japanese language education together. And we believe that they were all met. It indeed motivated all the participants and other learners who were among the audience to study the language harder.

As some expressed in the JALTAK meeting for reviewing the event, there are some areas that need to be improved. Most important of all is the participants' preparedness. Every year, most of the contestants prepare their speech in last minutes and hadn't have enough time to practice the speech. That, for sure, has to be improved in order to better the standard of the speeches. On the other hand, the main organizers,

that is, we the members of JALTAK, should also begin preparing the event well in advance rather than arranging it in just a month or two. That would ensure wider participation of contestants, more sponsors, and better speeches. Challenges are then on us, JALTAK members. Let us commit ourselves to make it a better contest next year!



第四回スピーチコンテスト優勝者 ダニエル・アレバさんへのインタビュー

1) どうして日本語を始めたんですか。

実はアニメが好きでしたから、日本語に興味を持ちました。そのとき私の一番好きなアニメはブリーチというです。そして映画も好きになりました、特に黒澤明の映画、たとえば七人の侍とか。どんどん日本の文化や武道にも興味を持ちました。合気道の練習を始めました。日本の歌もどんどん好きになりました。今私の好きな歌手は宇多田ヒカルと浜崎あゆみです。それで日本語の勉強を始めました。

言語も好きだと思います。今はフランス語もちょっとわかります。人の話すことがわかれば幸せになると思います。

2) どのぐらい、日本語を勉強していますか。どうやって勉強していますか。

最初はナイロビにある日本大使館で日本語の授業を始めました。三ヶ月ぐらい勉強しました。その後はJLPTのために一人で勉強をつづけました。大使館にある図書館で教科書を借りて、日本の映画を見て、音楽を聞いて、インターネットで勉強しています。ちょっと難しいけど、私は日本語が上手になることを目指しています。

3) 優勝したとき、どう思いましたか。

びっくりしました。最初はそんなことは無理だと思ったけど、優勝してから、日本語はそんなに難しいものではないと思いました。一生懸命頑張れば何でもできます。

4) スピーチでいちばん大変なのは何でしたか。

自分に自信を持つことでした。たくさんの方の前を話すことは本当に難しいです。ですからスピーチの前で、自分で鏡の前で練習することは必要だと思います。

5) これから、日本語を使って、どういうことをしていきたいですか。

子供のころから私の夢は日本へ一度行ってみたいでした。もちろん今も行ってみたくです。日本はすばらしい国だと思います。それより、まず日本へ留学したいです。そして日本で働きたいです、英語の先生とか。私がめざすのは翻訳家になることです。日本語はずっと勉強したいです。

ダニエルさんは、その後、国際交流基金の短期訪日研修に選ばれ、日本に留学することができました。

日本語教授法基礎講座

2011年6月18日に、JICCにて、日本語教育を専門としない青年海外協力隊隊員を対象に、小谷裕子隊員(KWSTI日本語教員)、蟻末淳国際交流基金日本語専門家・ケニヤッタ大学客員講師により、日本語教授法入門講座が開かれ、隊員9名、現地日本人教員2名、大使館職

員1名が参加しました。受講者の高橋美穂さんのレポートをご紹介します。



日本語教授法入門講座を受講して
青年海外協力隊・環境教育
高橋美穂

青年海外協力隊員(環境教育)としてケニアで生活するなかで、ケニア人の知人・友人から「日本語を教えてほしい」という声をよく聞く。自作のフレーズ・ブックを配って個別に出張ミニ授業をしようかと思っていた時、本講座の開催を知り、受講することにした。

講義のはじめに、他言語との比較などを通して、日本語の特徴について学んだ。日本語の単語はアクセントの高低によって4つに分類できることや、撥音・促音・長音も一音節として発音されることなど、ふだん母語として特別気に掛けず使っている日本語について、改めて気付かされるが多かった。



続けて「日本語教授法の基礎知識」として、さまざまなシラバスや教授法などについての講義を受けた。これまで使って来た教材で私にとって学びやすかったものは、場面シラバスが多かったな、などと思い返した。こういった分析もおもしろく、自分でシラバスを構成するにあたって有意義だった。定期的な授業をもつなどして、学習者と長い時間をともにできる場合、直接法で授業をするのも興味深いと思った。

最後に「文型導入・練習の方法」についての講義を受け、実際に、文型練習やタスク練習などの基礎練習を行った。練習の過程でもつねに前半の講義を振り返り、習ったことを確認しながら進めることができた。

講義の後にはワーク・ショップを行った。グループごとに文型をひとつ選び、その文型の練習をするための授業をつくって発表する、というものだった。各グループ、絵カードやレリア、ジェスチャーを使ったり、体を動かしたりしながら楽しくワーク・ショップにのぞめた。講義だけだと、「自分が誰かに教える」というアウト・プットが具体的にイメージできないまま終わってしまいがちだが、ワーク・ショップの時間をたっぷりと設けてもらったため、習ったことを自分のなかで消化し、誰かに伝えることが、その日のうちにできたので非常に良かった。

1日の講義でどこまで学べるか不安だったが、体系的な講義と実践的なワーク・ショップのおかげで、じっくりシラバスを練れば、私にも講義ができる、という自信がついた。とても充実した講義だった。今回の講義で学んだことを活かし、作りかけのフレーズ・ブックをミニ・テキストにパワー・アップさせ、身近な人に日本語を教えられたらと思う。



日本語教授法ワークショップー 文型導入を考える

2011年7月30日に、JICCにて、蟻末淳国際交流基金日本語専門家・ケニヤッタ大学客員講師により、文型導入に関する日本語教授法ワークショップが行われました。

JALTAK会員イアン・ワイルアさんのレポートを紹介します。

ストラスモア大学日本語講師

イアン・ワイルア

Ian Wairua

Japanese lecturer

Strathmore University

Contexts and Syllabi – Concepts for Effective Teaching and Learning

The JALTAK teachers' seminar held on Saturday July 30, 2011 was probably one of only a few important professional learning experience for me as a teacher so far this year. The topics covered, were extremely timely and relevant not just for my undergraduate students but also for Kenyan learners of Japanese language as a whole.

The seminar was held at the Japanese Embassy in Nairobi and conducted by Mr. Jun Arisue, Japan Foundation Japanese Language Expert and Visiting Lecturer at Kenyatta University. The seminar delved on issues relating to introduction of new language patterns in Japanese.

The importance of context in designing a teaching plan and in guiding proper learning was thoroughly emphasized. The meaning of a phrase or set of phras-

es is transmitted not merely from lexicon and but also on the place, the environment, the people involved, the time, the preceding events and other situational factors that in total form the context of a conversation. Understanding how the context influences the meaning - also known as pragmatics - is critical to helping learners gain the skills necessary to effective communication.

Mr Arisue illustrated this aptly by looking at a typical phrase 暑いですねえ。Depending on the context the meaning conveyed could vary significantly as 窓をあけてほしい or ビールを出してほしい or 喫茶店に入りたい、… and so on and so forth. This has major repercussions for the teacher and learner. Firstly, it means that the teacher must prepare the context beforehand. The teacher must think about the prevailing learning environment both mental and physical and may have to interfere to create the desired context for a particular learning outcome. Different contexts will most likely produce different meanings and therefore different learning outcomes.

This pragmatics viewpoint of language learning has specific consequences for the language teacher pursuing effective foreign language teaching in Kenya. The great variety of possible contexts some unseen or unintended by the teacher may present challenges. For instance, if in Japan a group of people sat down to relax and chat and there was a beer cooler in the background, and if in this situation a person said 暑いですねえ then most likely ビールを出してほしい would be the most likely meaning. However, any Kenyan would tell you that such a meaning would not necessarily be gleaned in a Kenyan context not just because beer is not considered as a solution for the heat, but also because the conversational environment in Kenya tends to be much wider than the immediate surroundings. This might mean that the teacher must create a lot

more controls and give explanations before assuming that the context has been set in place. But the context issue is further complicated by the sheer heterogeneity of Kenyan learners who come from numerous different cultural and personal backgrounds. A particular context may carry different meanings for different learners in the same class which complicates both teacher-learner as well as learner-learner interactions.



Great care must be taken to learn the students' backgrounds, to determine what meanings different contexts create. If this poses fresh challenges to teachers who are Kenyans themselves, it must be an even greater challenge for non-Kenyan teachers.

Another consequence of this pragmatics approach to language pedagogy relates to the use of teaching and learning materials, especially text books. Unless the teacher prepares his own texts relevant for his students' backgrounds and potentially applicable contexts, textbooks with "authentic" material are rare to come by.

However, even before such considerations, Mr. Arisue explained to the seminar participants that profitable use of a textbook requires an understanding of the different categories of textbook syllabi. The traditional text follows a grammatical syllabus style which emphasizes the proper and acceptable use of grammar items such as nouns, subjects, verbs, tense,

etc. This style has the advantage of progression from simple to difficult forms. Unfortunately, this style does not provide learners with the language they need to use for their specific and current situations and, according to the seminar documents, is reminiscent of the largely unsuccessful method of teaching English in Japanese schools. A variation of this style is the structural syllabus which builds up language knowledge systematically and progressively beginning with basic sentence patterns.

Perhaps criticism of the grammatical and structural syllabi for ignoring immediate learner needs and producing a language that is “not alive”, is what may have led to many texts having a situational syllabus, topic syllabus, skill syllabus, functional syllabus or task syllabus. Of course, no textbook syllabus is a panacea for all, and the chosen text will depend on the expected or planned learning outcomes. But in the case of Kenya, unavailability of a wide variety of texts results in little or no choice for most teachers. Using a wider variety of materials self-made or those available freely online provides a viable option.

To consider the importance of the context, to produce a relevant context that gives meaning to the language being learned, and to carefully consider the syllabus of the text; these are powerful and fundamental concepts that should begin to inform the Japanese language teacher in Kenya.

In my mind, an important conclusion should be the need for teachers to look at the Kenyan situation critically in the light of the insights from this seminar. The future of Japanese language learning in Kenya may lie in the ability to apply proven language pedagogies through understanding the specific challenges posed by the unique cultural and social environment.

日本語教授法基礎講座「応用練習篇」

2011年11月5日に、エジプトのカイロ日本文化センター、村上吉文国際交流基金日本語上級専門家により、セミナーが行われました。JALTAK会員8名に加え、青年海外協力隊非日本語教育隊員他5名が参加しました。JALTAK会員横山容子さんのレポートです。



スカイネット・カレッジ

日本語教師

横山容子

Yoko Yokoyama

Japanese teacher

Skyenet college

1 1月5日にカイロ日本文化センター上級専門家の村上吉文先生による「日本語教授法基礎」のセミナーがJICCにて開かれた。主に『応用練習』をテーマにした講義で、今後の日本語教育に早速取り入れ、活かしてゆけるような有意義な内容であった。

まず、村上先生よりセミナー参加者に対して次の問いかけがあった。「話す量を増やすために授業でどんなことをしているか？」この問いかけに対し、以下の意見が出た。

*学習者に自分で例題文を作ってもらおう。

*日本人の友人を呼んで学習者が多くの日本人と話

す機会を作る。

*会話練習を導入する。

*身近な内容をトピックにあげることで話しやすい雰囲気を作る。

*教師が一人の学習者へ質問をしたら、その学習者から別の学習者へ質問をしてもらう。

次に『応用練習とは何か』についての説明があった。以下に要点をまとめると、

*応用練習とは、知識を伝えるところ・例文を繰り返して聞くところではない。反復・文型練習ではない。

*応用練習の目的は『コミュニケーション』である。ゆえに基本練習は終わっている。正しい形と言うより、正しい内容が伝われば多少の誤用は無視して構わない。

*応用練習となるための条件は、①情報差（話者と聞き手に情報量のギャップ）があること。②談話構成（コミュニケーションの始めから終わり）があること。

セミナーの後半は効果的な応用練習である『バラバラ練習』の紹介があり、実際にセミナー参加者同士で練習を実践した。『バラバラ練習』とは、自由に動き回り異なる情報を持つ多くの人と話すための練習で、今回は村上先生より「ジャンヌダルク」と「人間神経衰弱」の練習方法の紹介があった。

この二つの練習方法の特徴は、①パソコン（エクセル）技術の利用により、一気にタスクシートを作成できること。②簡単な方法で情報差のあるコミュニケーションの材料が作れること。③内容は学習者がイメージしやすい身近なものであること。

「ジャンヌダルク」は情報の断片を集める練習で、例えば全員が警察官役となり容疑者の一日の行動を別の警察官に聞いて回る。このジャンヌダルクの方法は、多くの人とコミュニケーションをとりながら異なる情報を自分で集めていく練習になる。

「人間神経衰弱」は同じ情報を持つ人を探す練習である。例えば「結婚相手探し」と題して、結婚に対する同じ条件を載せたロールカードをペアで作成し、学習者にランダムに配る。学習者は手元のカードと同じ条件を持つ相手を探して回る。この練習は会話を発展させながら、同じ情報を持つ人を探していく練習である。

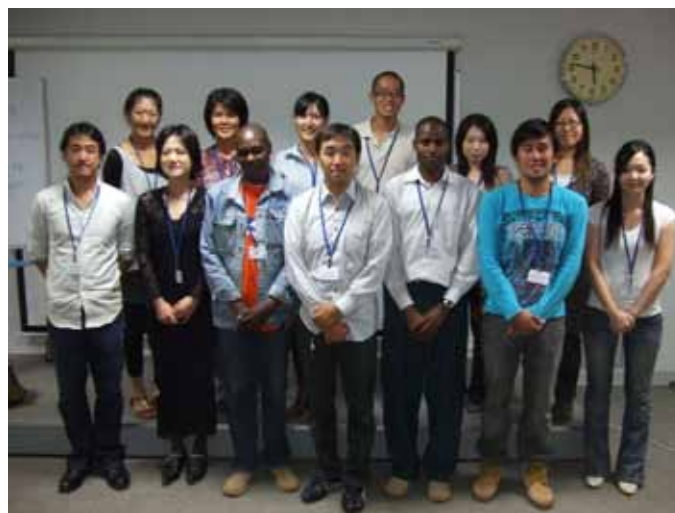
【セミナーを受けての感想】

JICCへのセミナーへは今回初めて参加したが、今後の日本語教育に早速取り入れ、活かしてゆけるような有意義な内容であった。参加者の人々と意見を交わす機会もあり、他の方々が普段どのような工夫をしているのかを知ることができ、大変参考になった。

「応用練習とは何か？」と具体的に聞かれたら、セミナー参加前の自分は曖昧な答え方しかできなかったであろう。このセミナーに参加し、「応用練習」の「本来の目的」について良く理解することができた。

普段は日本語の初級を教えているが、紹介されたどちらの練習も内容を初級に設定することですぐに実践できることがわかった。また、机から離れ自由に動き回る練習方法は、より自然な会話を行うのにふさわしいと感じた（会話というものは、人と人が向かい合って行うのが自然な形であるから）。

今回のセミナーで、自分（教師）の発想と工夫次第で授業の内容もより豊かなものに、多岐にわたるものになりえるのだと、改めて感じた。現状に満足せず、常に新しいもの・今までの自分が発想しなかったことに対して敏感でいられるような教師でありたいと思う。



JICC日本語入門講座

JICCにて、近藤彩ウタリー・カレッジ講師(2011年2月担当)、蟻末淳国際交流基金日本語専門家・ケニヤッタ大学客員講師(2011年6月-8月担当)により、二度に渡り、日本語入門講座が行われました。日本語の勉強を始

めようとする学習者に、日本語の考え方などを紹介し、今後、語学学校、大学などで日本語学習を潤滑に進められるための入門としての講座で、各回約20名が受講いたしました。近藤講師のレポート、講座の学習者の感想をご紹介します。



ウタリーカレッジ日本語講師
近藤彩
Aya Kondo
Japanese Lecturer
Utalii College

在ケニア日本国大使館広報文化センター所長菊地齊氏より、「日本語入門講座」の指導を仰せつかり、『楽しみながら学べる日本語』を目的として実施しました。

センターが募集した学習者のレベルは、「ゼロ初級」。日本・日本語に興味関心ある方たちを集め、毎週、水曜日午前10時半から12時半までの二時間クラスを担当しました。

初日は、定刻よりも早く席に着いている学習者が数人。始業後、時間差攻撃の如く、ゾロゾロと部屋に入室してくる学習者の様子を見て、“ケニアらしい”と言えば、“ケニアらしく・・・”。しかし、これでは「定刻に来た学習者にとっては非常に迷惑だ」という旨を伝え、次回のクラスからは「必ず定刻に来るように」と念を押しました。

半信半疑のまま、二週目を迎えると、皆さん定刻に多数、席に着いていて、ホッとすると同時に感激しました。

(ナイロビの異常交通渋滞事情を考えると) また、新入生も続々と二週目、三週目、そして、最終週の四週目にも迎えることになり、とても賑やかなクラスになりました。

授業は、社会人をメインに「本当に勉強したい」という情熱あふれた方々に恵まれました。積極的なことといえば、板書解答をお願いすると、一斉に全員が立ち上がり、取り合いになりました。さらに解答欄を奪われた方の取った行動が非常にユニークなことに、

“既に解答されている余白に同じ解答を記入する”

という一風変わった光景を目にしました。それが、一人だけではなかったところが、面白いかぎりです。

「学生の本分は学問にあり」。本来はそうあって欲しいものですが、限られた時間内で参加して下さっている彼らの方が、自宅学習時間が長いのではないかと感じました。それは、毎始業時での「復習タイム」で、彼らの漏れのない発話で再確認しました。

2011年3月5日にスピーチコンテスト(会場: 在ケニア日本国大使館)を控えており、せっかくの機会と大使館コースのメンバーでエンターテインメントに参加しようと計画しました。

部門は「歌」。曲目は、『桜の葉』(AKB48より)。ちょうど日本の卒業式、離任の時期とも重なり、また、「花」といえば、「桜」という日本古来の文化、慣習も同時に紹介することができました。とくに「人は皆 満開に咲いた夢 忘れはしない」という歌詞に、大変興味関心を持って練習に臨めました。

残り二週では、授業時間を過ぎても「もっと続けましょう!」「もう少し歌の練習がしたいです!」と。リクエストに応え、続けること13時半まで。いつの間にか、“三時間コースに取って変わっていました!!!”

スピーチコンテスト当日は、本務校のウタリ・カレッジの学生と一緒に参加。エンターテインメント部門で優勝は獲得できなかったものの、爽やかな笑顔を見せてくれました。当日は、日本文化祭も同時に開催されており、文化体験・映画・日本食試食などにも触れることができ、

教える側も学習者側も良い機会に恵まれました。これを機にますます日本・日本語に興味関心を持ってもらえることを心より期待しています。

幸せなことに学習者の皆さんから、「是非、このコースを続けてください。」「先生の授業、とても楽しかったです。」と良いコメントを頂き、まさに『教師冥利に尽きる』と実感致しました。



<学習者からのコメント>

I like Japanese and its very interesting. Kondo sensei makes me want to learn more of Nihongo. Arigatoo Gozaimasu.

(Evah)

The class is exciting and our sensei Aya KONDO knows how to teach and drive the point home. She knows how to use gestures and examples which makes it easier to learn and enjoy Japanese language. I can't wait to look forward to the next lesson and would love to continue till the highest level. Our sensei is a very happy person and we ever learning Japanese songs.

(Charles)

Aya sensei you are a wonderful teacher. I hope that through your teaching I will excel in Japanese language and be able to longtime, even participate in Exam and language test.

(Maurice)

You are a good teacher and very social with your students. I would like to continue with Japanese.

(David)

I enjoyed the class. The teacher taught at a good pace and was patient. She supplemented her teaching with handouts which made personal practice easy. I would appreciate continuing.

(Waiyaki)

The teacher was interesting and encouraging. The best class ever. I'm more interested in learning the Japanese language and I would appreciate more free lesson. The teacher Aya Kondo also used variety and materials for efficient understanding.

(Lee)

I have enjoyed learning Japanese language at JICC. Our lecturer, Aya sensei was perfect, interesting and interactive. The lessons were enjoyable, since the first day of introduction up to the time we were able to conduct basic communications. I would wish to continue learning Japanese language and culture. Big ups JICC! Sayoonara!!

(Khayati)

It has been great learning experience. I would greatly like to appreciate the Japanese Embassy for this and also Ms. Aya for the wonderful lessons. I have had as her student and would definitely like to learn Japanese language and culture. Thank you.

(Lenny)

A very good lecturer. I have enjoyed my classes and would like to continue next time. Japanese is an interesting language and with an interesting lecturer Aya Kondo. It's easy to learn and understand. Thank you. Arigatoo gozaimasu. Sayoonara.

(Ceazarine)

JALTAK勉強会

JALTAKでは、定例会議の際に会員有志による勉強会を行っています。

第一回(2011/5/21)は中村勝司会長による形容詞の練習の実践例。グループで暗記してお互いにクイズを出すなどのアクティビティーが紹介されました。日本人会員はスワヒリ語、ケニア人会員は日本語の新しい単語で試してみましたが、スピーディーな展開をゲーム感覚で楽しみました。

第二回(2011/6/25)は近藤彩さんがひらがな、かたかな、漢字の書記法について、歴史的背景や使用法などの基礎的な知識の再確認のための発表をしました。ケニア人教員も日本人教員も、もう一度改めて勉強すると、知っているつもりのもことも案外あやふやだったりすることに気付き、大変勉強になりました。

第三回(2011/9/10)はイアン・ワイルアさんが、言語教育におけるソーシャルメディアの役割について紹介してくれました。ここ、ケニアでも、コンピューターのネットワークが、語学教育において、少しずつ重要になってきていることがよくわかる発表でした。



日本語能力試験

2011年12月4日にウタリー・カレッジで日本語能力試験が実施されました。今年は約100名が日頃の日

My Experiences in Japan

国立ケニヤッタ大学で日本語を勉強したペリス・カヴィタさんは、国際交流基金の長期訪日研修プログラムで、関西国際センターで、6週間の研修を受けてきました。日本での経験のレポートをご紹介します。



Peris Kavita

I have watched Japan video topics on local TV over the years and marveled at the technology and culture that has been showcased on the program. I had dreams of someday visiting Japan and experiencing it firsthand. Thanks to the Japan foundation Japanese-Language Program for University Students my dreams came true.

After taking the N5 JLPT exams in December (2010), I had the privilege of visiting Japan for six weeks through a scholarship by Japan foundation. I participated in the Japanese-Language Program for University Students (Spring Course) from May 11th to 23rd June 2011. We were eighteen university students from eleven countries which included: - Sri-Lanka, Croatia, Cambodia, Azerbaijan, Argentina, India, China, Chile, Colombia and Russia.

The program consisted of different types of activities like home-visit, study trips and cultural activities.

Since they had been well thought out and planned in advance it was a great learning experience full of fun.

The classroom activities included: Interview class where we were placed in groups in which we selected a topic and formulated questions. We conducted the interviews in Kobe and Ritsumeikan University and at the institute where we interviewed the local community. Later we made a PowerPoint presentation of the findings. There was also speech class, in which we selected a topic, developed a script and presented it in class. It was videotaped and afterwards one could access the tape and review ones performance.

There were also Class discussions on different topics such as Japanese education system, family, marriage, religion. We compared the lifestyle in Japan to that of our home countries. It was not only a great way to help us learn to express ourselves in Japanese but also share cultural experiences from our respective countries. There was a class in which we learned how to handle Japanese kana/kanji on computers and we were also introduced to different websites that we can use as we continue studying the Japanese language. We also visited a local primary school and introduced our countries to the students.

The cultural activities included: Ikebana, Aikijustu (a form of Japanese martial arts) writing Haiku and home visit where I learned to cook Okonomiyaki (very delicious); it was one of my best experiences. We also had the opportunity to see Kabuki and Rakugo performances.

We went on study trips to Kyoto, Nara, Kobe and Hiroshima where we visited various temples, world heritage sites and famous tourist sites. The trips were an amazing experience; I was able to see things that I had only seen on TV, the internet and in books.

It was a unique and memorable experience that helped me gain a better understanding of the rich Japanese culture and gain confidence in speaking in Japanese; I also learnt some study tips from fellow

participants.

My deepest gratitude to the Japan Foundation, JICC and last but not least my Japanese language teachers at Kenyatta University .This program was a once in a lifetime opportunity. I will forever treasure the memories and hope to be able to go back to Japan someday.



Kisumu Children's Festival

ケニアで活躍する青年海外協力隊有志の奨学金制度「KESTES」のメンバーが中心となり、2011年4月16日に「Kisumu Children's Festival」がキスムで開催されました。開催の中心メンバーの一人の青年海外協力隊員の菅井河奈子さんは任務であるPCインストラクターの傍ら、日本語の授業も行っています。

青年海外協力隊・PCインストラクター
菅井河奈子

私は、ケニア西部にあるチャバカリ男子高校にてPCインストラクターとして活動しています。主な活動内容は、コンピュータの修理とメンテナンスを行い、コンピュータ管理のサポートを行っています。また、放課後の時間を利用して、学生を対象に日本語の授業も行っています。

2011年4月16日、ケニア3番目の都市、キスムにあるミ

ミュージアムにて「Kisumu Children's Festival」を開催しました。

娯楽の少ないケニアの子どもたちに少しでも楽しんでもらおうと企画したのが始まりです。

ケニア協力隊有志で構成されるケニアの学生を対象とした奨学金制度「KENYA STudents' Education Scholarship (KESTES)」のメンバーを中心として、約50名の協力隊が集結し、このフェスティバルを創り上げました。



国の発展とともに増えたプラスチック製品。しかし、ゴミに対する国民の意識がまだ追いついてないケニア。そんな子供達に少しでも地球のことを考えてもらえるように、このフェスティバルに「環境問題について考えよう」というテーマを付けました。

子供達に体を動かしながら環境について考えてもらえるように、様々なアクティビティを用意しました。

「未来に残していきたいケニアの宝物」について、自由に絵を描いたり、ゴミは分別できることを知ってもらうために、ゴミの分別競争を行ったり、いつもは捨ててしまうストローで笛を作ったり、ペットボトルで作った楽器を使って踊ったり、たくさんのアクティビティを体験してもらいました。また、日本文化紹介として、写真の展示、相撲、空手、習字や日本の玩具を体験したり、着物やはっぴのファッションショーにも参加してもらいました。

私の個人的な活動として、配属先の学生による日本語の歌を発表しました。

曲名は、「世界に一つだけの花」。日本語と発音が似ているスワヒリ語を話す彼らの歌の完璧さには、驚かさ

れました。



また、2011年3月11日に発生した東日本大震災の被災者の方々へケニアの皆さんからたくさんの応援メッセージを頂きました。

これらのメッセージは、私たち協力隊員が任国に派遣される前に訓練を受けている、JICA二本松訓練所(福島県)で避難生活を送られている被災者の方々に届けられました。



当日は、予想を大きく上回る、500名以上の来場者が会場に足を運んで下さいました。

ケニア協力隊による、初の大規模なフェスの開催ではありましたが、たくさんに方々のご協力のおかげで、ケニアの子供達にとって、特別な一日になったのではないかと思います。

そして、私たち協力隊員にとっても、子供達の笑顔がたくさん見れた心に残る一日でした。

New Books on the JLTP

New books on the JLTP arrived for use by Japanese learners in the library of Japan Information and Culture Centre (JICC), which is in the premises of the Embassy of Japan in Upper Hill. These are guide-books on how to tackle the question or workbook with sample questions for different levels. The date for this year's JLPT has been set for 4 December, and anybody who is interested in taking it, it's worth going through some of these books!

Note: the books on the new JLPT have two copies each, and one copy of them can be borrowed for the period of two weeks maximum. The other copy of each text is kept for in-library use only.



JALTAKジャーナル第二号の発行は遅れに遅れてしまいました。ケニアに来てから約1年半、ポレポレ(「ゆっくり」)生活も身についてきたようです。ポレ・サーナ(「すみません」)。でも、時間をかけた分、記事が充実し、読み応えがある会報になったと思いますが、いかがでしょうか…ご感想をいただければ幸いです。

今号にもたくさんの方の寄稿をいただきました。感謝いたします! アサンテ・サーナ (蟻末)

JALTAK

(Japanese Language Teachers' Association of Kenya)

ケニア日本語教師会

jaltak[at]e-nihon.net